

令和2年度『福祉の心作文コンクール』最優秀賞受賞作品

<小学生の部>

塩竈市立第一小学校 6年 大友 櫻子さん

「パーキンソン病のばあちゃん」

ばあちゃんは、パーキンソン病が分かって約十年が経ちました。パーキンソン病とは、手足を動かそうとしないのにふるえたり、体のバランスが取りづらく転びやすくなったり筋肉が固まり、日常生活に支障が出てくる病気です。

今のばあちゃんは、私から見ても病気が進んでいるのが分かります。目の前の物が取りづらかったり、体が右にどどんかたむいて動きもおそく食事もゆっくり食べるようになりました。そして、一番の楽しみだったビールも飲まなくなり、学校まで行っていた散歩も家の周りだけになりました。お母さんが言っていたのは、「これからは、もっとばあちゃん中心の生活になると思う。ベッドを入れたり、食事もこぼす時もあるけど、あったかく見守ってね。」

でも、そんなばあちゃんに冷たい態度をとってしまうことがあります。ばあちゃんが、

「忘れ物ない？」「うん・・・」

「名札付けた？」「うん・・・」

など話しかけられても「うん・・・」だけで会話を終わらせてしまいます。

でもばあちゃんがないと家の中は、シーンとしてなんとなく寒くなります。ばあちゃんといつも話はないけど、どこか安心するのです。私にとって、ばあちゃん存在は、とても大きく大切です。

ばあちゃんと母が散歩をしている時におとなりの人からお茶をごちそうになったり、デイサービスで楽しくお話をいっぱいしてきたり、リハビリの人にマッサージで体をほぐしてもらったり、ばあちゃんの顔を見に来てくれる親せきのおばさんやいろんな人に支えてもらっています。

私は、父、母、兄、私、ばあちゃんの家族五人でくらしています。中一の兄は反こう期で手伝いは、ほとんどやらなくなりました。

「なんで、私ばかり。」

と思う時がいっぱいあります。でも、ばあちゃん子の兄は、たまに変顔をしてばあちゃんの顔を笑わせたり、一度だけチャーハンをばあちゃんに作ってあげていました。早く反こう期が終わってほしいです。

ばあちゃんは、いつも弱音をはかず自分ができる所までがん張り、無理はしないところがばあちゃんの良いところだと思います。私は痛い時に痛いと言わず、がまんしてけがにつながりました。自分のことは、自分が一番分かっているから、自分の意見をちゃんとと言えるように、ばあちゃんを見習いたいと思います。

ばあちゃんへ

「ねえばあちゃん、今楽しいですか？」「どこか行きたい所は、ありますか？」「今、こまっていることは、ありますか？」今度聞かせてください。ちょっとずつでいいから、かなうといいね。

私の願いは、一度でいいから泳いでいるすがたを見てもらいたいです。これから先、もっと体が不自由になるかもしれないけど、ばあちゃんの、いつも前向きながん張り、病気に負けないで下さい。私の負けず嫌いは、きっとばあちゃんに似たんだね。私も最後まで後悔のないようにがん張るよ。

<中学生の部>

塩竈市立第一中学校 3年 古川 姫菜さん

「生きること」

私は、障がい者について興味や関心があまりなく、別に知らなくても自分はどうでもいいことだと思っていました。

私が中学二年生の春、十一歳差の弟が生まれました。私には二歳年下の妹がいますが、弟はいなかったのでもとても嬉しかったです。

しかし、弟はダウン症でした。私は一瞬、頭の中が真っ白になり、嬉しさが悲しみや不安に変わりました。それは、父からの「ダウン症。」というテレビなどで、たまに聞いていた聞き慣れない言葉でした。私は、ただ父からの弟についての説明に耳を傾けることしかできませんでした。ダウン症は、体が弱く、一般の人よりも寿命が短い。大腸の一部が壊死していて、手術が必要で成長ホルモンの分泌も少なく、一般の人よりも成長が遅いということを父から聞きました。私は、必死に手術のことについて、聞いていました。まだ生まれたばかりだということに、亡くなくてもおかしくないようなお腹の手術をするなんて、言葉にもできない、なんでよりによって自分の弟が・・・という悔しい気持ちになりました。私は、祈ることしかできませんでした。そして、手術は成功しました。弟が亡くならなくて、よかったという、ほっとした気持ちでいっぱいになりました。と同時に「私が長女として、この子を守らなきゃ。」という意志が芽生えました。でも、いざ弟のお世話をしてみると大変で、急に泣き出したり暴れ出したりするので、落としてしまいそうになり、両親に怒られてしまったり、ストレスでいっぱいになり、心が何度も折れそうになりました。そんな時、弟の笑顔見るとストレスが一気になくなり、弟が今、一番大変な思いをしているのに、私が折れてどうするんだ！という思いになり、一生懸命お世話をしました。

そんなある日の夜、私の父と弟の話になり、その会話の中で衝撃的なことを知りました。その衝撃的なこととは、私の弟がまだ母のお腹にいる時の話で、もともと私の母は、たばこを吸っていて毎日のように吸っていました。お腹の中に赤ちゃんができたので、喫煙はしないと、父に約束したそうです。しかし、母はお腹の中に赤ちゃんがいるということに、たばこを吸ってしまったことがあったそうです。私は怒りが込み上げ、母に強い恨みを抱きました。でも、このことを母に話したら、しっかり反省していました。私もあの時、心が折れていたら大変なことになってたかもしれない、と改めて実感しました。

私は今、中学三年生になり、受験が迫ってきているので弟のためにも合格して早く、仕事やアルバイトをして、弟のこと、家族のことを支えていける立派な大人になれるよう頑張りたいです。弟が産まれる前、私は、障がいや障がいを持っている人について興味も関心も何もありませんでした。ですが、弟が産まれ、障がいやダウン症について知ることができ、よかったと正直思いました。私の弟以外にも他の病気と闘ったり、体の不自由な方々もたくさんいらっしゃると思います。近年では差別という言葉も出てきていますが、障がい者の方々も、私たちと同じ人間なんです。少し他の人と違うからって、目を背けないでください。もし、周りに障がいを抱えている人がいたら、そっと手を差し伸べ、しっかり向き合ってください。そうすれば少しでも明るい世の中になると私は思います。

私は、弟という大切な存在ができ、障がいなどを知っていきました。世界には障がいを抱えた方々がたくさんいます。普通の人とは違いますが、それもその人自身の個性だと私は思います。

私は、一人一人違う見方や性格、それを活かして、自分なりの他の人にはない世界で一つの生き方をしてほしいと思います。それが「生きること」だと私は思います。